

## 6 天草北部島嶼域出土甲冑の検討

西嶋 剛広

### はじめに

カミノハナ古墳群が所在する天草北部島嶼域にはいくつかの甲冑出土古墳が知られている。これらから出土した甲冑については、その存在は知られているものの詳細な検討がなされてこなかった。これらの資料について検討をおこなうことは、カミノハナ古墳群の性格、天草北部島嶼域の古墳時代像を考える上で重要なことであると考えられる。

そこで本稿は、天草北部島嶼域から出土した甲冑について検討し、その位置づけをおこなうことを目的とする。その後、天草北部島嶼域における甲冑出土古墳被葬者の性格や甲冑がもたらされるに至った背景について若干の考察をおこないたい。

### 1 天草北部島嶼域出土甲冑の検討

天草北部島嶼域には、現在のところ4基の甲冑出土古墳が確認される。これらの古墳の分布図と一覧表を示す(図1, 表1)。分布をみるとすべての古墳が、有明海と八代海を結ぶ海峡付近に集中している。

これら4基の甲冑出土古墳のうち、清水乙古墳については、1918年の『熊本県史蹟調査報告』に箱式石棺から鎧の破片が出土したことが報告されているが(角田1918)、詳細不明であるため、今回の検討対象からは除いている。

以下、清水乙古墳を除いた3基の古墳から出土した甲冑について、その概要を示し、検討をおこないたい。

#### (1) カミノハナ1号墳(図2)

カミノハナ1号墳から出土した鉄片を再整理したところ、冑と鍔の破片が存在することが確認された。以下、その概要を述べる。なお、詳細は本書第II部

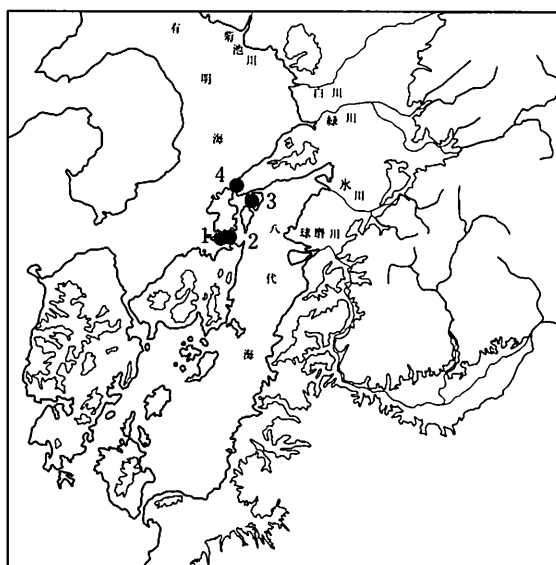


図1 天草北部島嶼域甲冑出土古墳分布図  
(番号は表1に対応する)

表1 天草北部島嶼域甲冑出土古墳一覧表

No	古墳名	所在地	墳形・規模	主体部	甲冑		付属具			
					冑	甲	鍔	頸	肩	他
1	カミノハナ1号墳	上天草市松島町合津	円墳・13m	横穴式石室	鍔留冑		○			
2	カミノハナ3号墳	上天草市松島町合津	円墳・12m	横穴式石室		横板鍔留短甲				
3	鬼塚古墳	宇城市三角町戸馳	円墳・14m?	横穴式石室	小札鍔留眉庇付冑	三角板革鍔短甲?	○			
4	清水乙古墳	宇城市三角町磯山	?	箱式石棺		鎧				

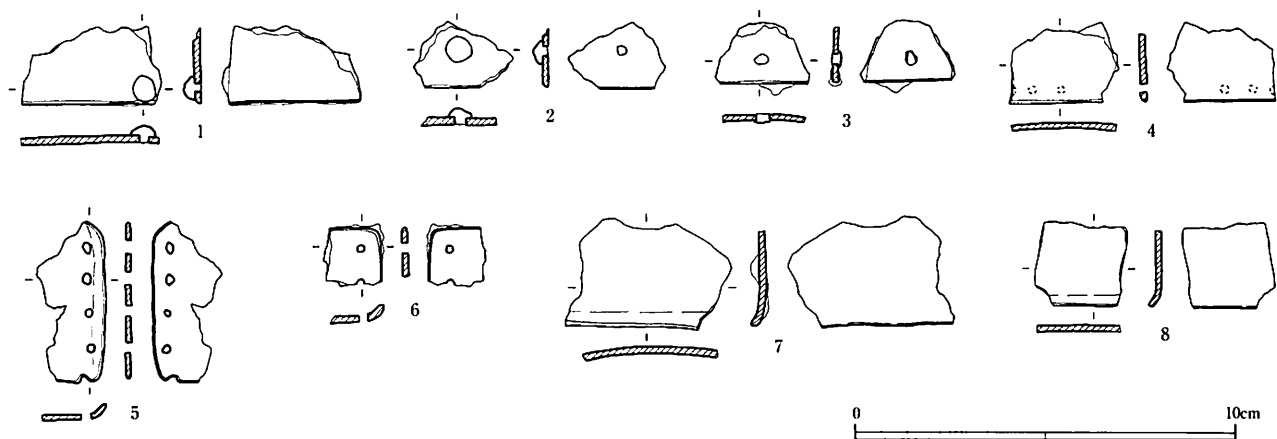


図2 カミノハナ1号墳出土土甲冑実測図 (Scale: 1/2)

を参照されたい。

冑の破片は、帯金片（1・2・4）、地板片（3）に分けられる。帯金片のうち1・2は細片であるため、胴巻板、腰巻板のいずれにあたるものか判断できない。いずれにも外面に直径約5mmの鋌が認められる。鋌は平面形態が円形、断面形態が半円形で、鋌頭の高さは約2.5mmである。鉄板の厚さは1.7mmである。4は腰巻板下辺部片である。X線画像を観察すると、下辺沿いに鋌付孔が3つ確認できる。地板片（3）の内面には鋌脚が認められる。鋌脚は叩き潰されており、平面形態は不整形な楕円形である。鉄板の厚さは1.7mmである。細片であるため、地板形状は判断できない。

鋌の破片と判断できるものは、鋌前端部片（5・6）と、鋌下辺部片（7・8）に分けられる。鋌前端部は外側に向かってわずかに折り返されており、端辺沿いに孔が開けられている。5の孔周辺には有機質がわずかに遺存しており、革覆輪が施されていたことがわかる。7・8は鋌下辺部片である。いずれも下辺が折り返されており、鋌最下段の破片であると考えられる。

以上から、カミノハナ1号墳から出土した甲冑についてわかるのは以下のとおりである。冑は鋌留冑であるということ以外、衝角付冑、眉庇付冑の区別や地板形状を判断することはできず、詳細を知ることができない。鋌については、上下の幅が約4.5cmの板金が用いられる板鋌であり、前端部がわずかに折り返されていること、端辺沿いに有機質が認められ革覆輪が施されたものであることがわかる。また、鋌最下段の下辺部はわずかに折り返されている。鋌留冑に付属する鋌は3段構成以上であるという古谷毅の指摘（古谷1988：p.14）に基づけば、本例は3段以上の多段鋌であると考えられる。鋌は、2009年度刊行予定のマロ塚古墳報告書に掲載される鈴木一有の論文（鈴木2009予定）に基づけば、TK208型式期新相段階に位置付けられるものと思われる。

## (2) カミノハナ3号墳（図3～5）

カミノハナ3号墳からは横矧板鋌留短甲が1領出土している。今回、再整理の結果、1982年に熊本大学文学部考古学研究室によって報告されたものと異なる知見を得た。各破片の実測図（図3・4）、及びそれに基づいて作成した復元図（図5）を図示した。以下、その概要を示す。詳細は本書第Ⅱ部を参照されたい。

短甲は前胴6段、後胴7段構成の横矧板鋌留短甲である。右前胴開閉式で、蝶番板は前胴にのみ取り付けられている。蝶番金具は長方形2鋌形式で、前後胴にそれぞれ2つずつ取り付けられていた痕跡が残る。金具は、前胴蝶番板下側、後胴下段地板に取り付けられていた2つが残存しており、後者

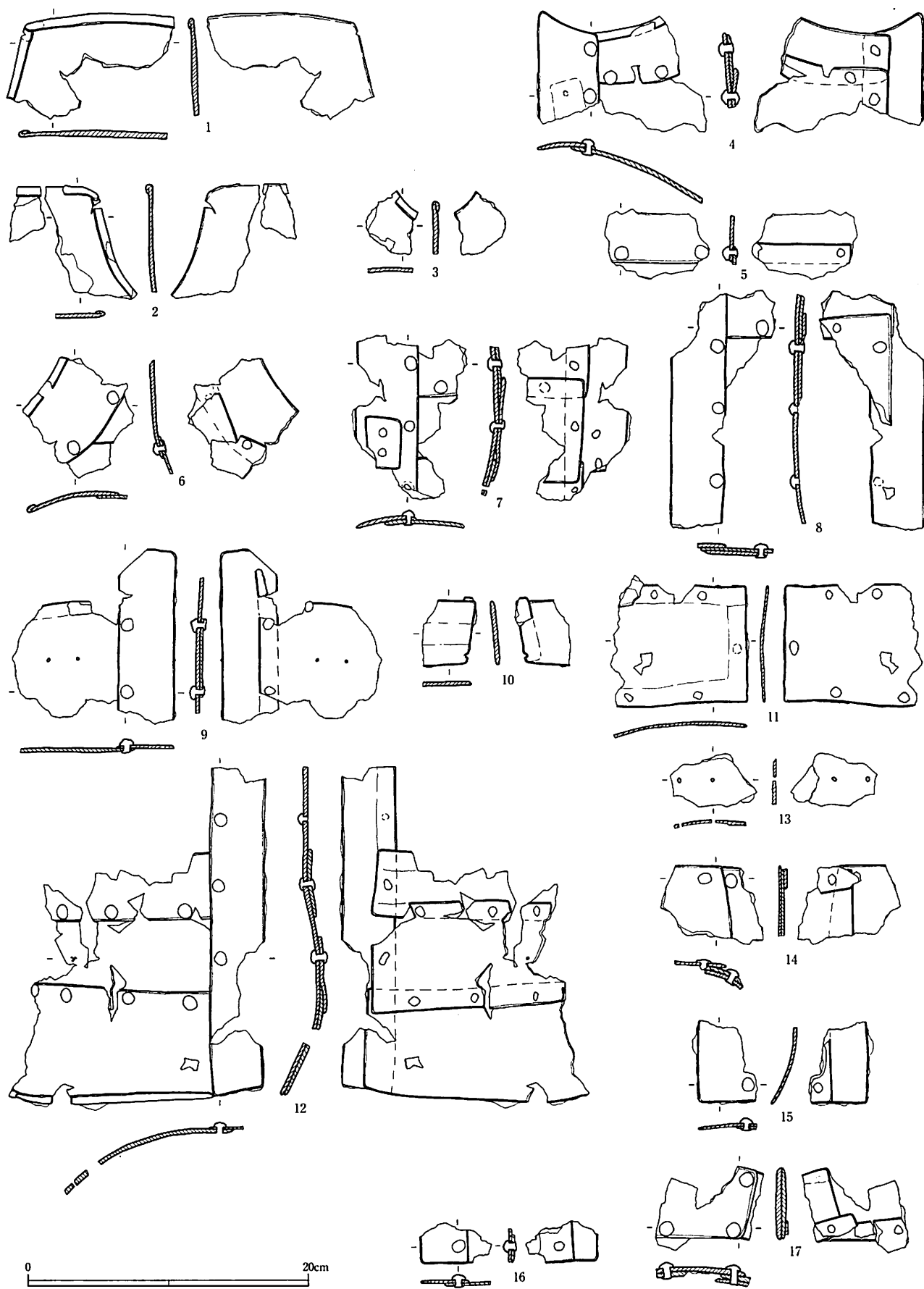


図3 カミノハナ3号墳出土短甲実測図(1) (Scale: 1/4)

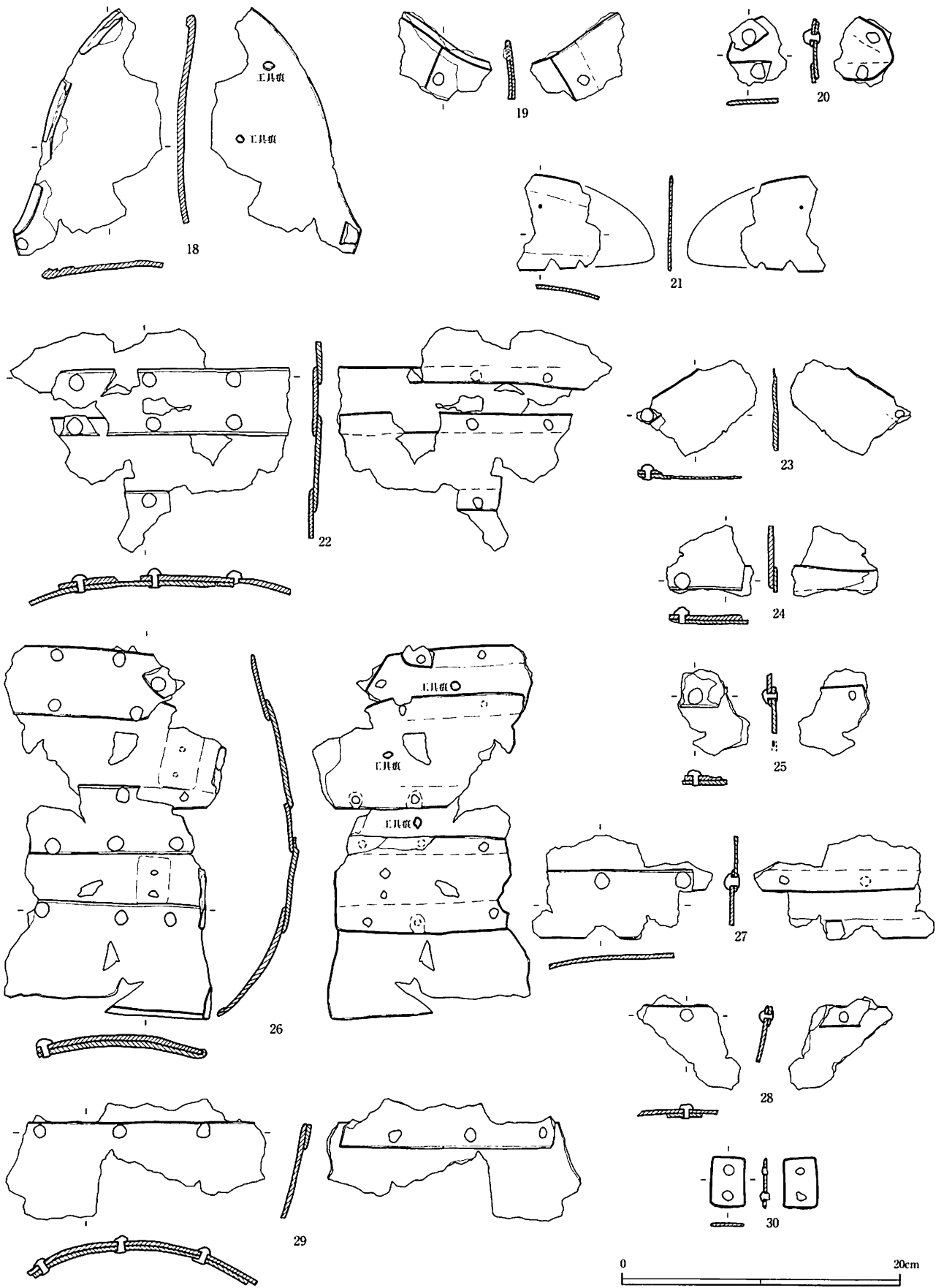


図4 カミノハナ3号墳出土短甲実測図(2) (Scale: 1/4)

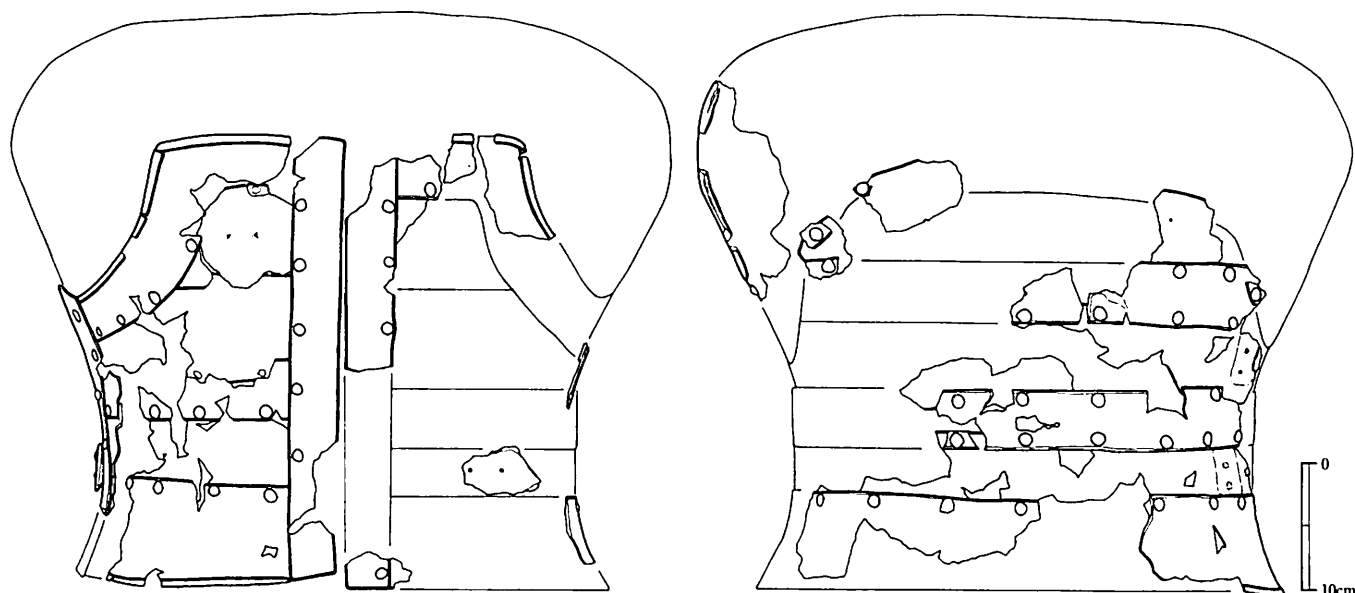


図5 カミノハナ3号墳出土短甲復元図 (Scale: 1/6)

は短甲本体から脱落している。覆輪は鉄折覆輪で、引合部、右前胴脇部を除いた全周に施されている。ワタガミ受緒孔、腰緒孔、ワタガミ掛緒孔、ワタガミ貫緒孔がそれぞれ前胴上段地板、下段地板、後胴上段地板、後胴上段帯金に認められる。また、本短甲の特徴としては、押付板右脇に小鉄板が鋲留されていること、豎上板と押付板との結合では、鉄板の重ねが通有と逆になっていることなどがある。短甲に用いられている鋲は直径が10mmを超える超大型鋲である。ただし、蝶番金具を短甲本体に取り付けるために用いられている鋲はやや径が小さい。短甲の編年上の指標として用いられることの多い後胴上段帯金とその上下段の地板とを結合するための鋲数は上下辺とも7鋲である。本例に用いられている帯金の上下幅は4.9cmであり、非常に幅広い。

製作に関する特徴については、鉄板の結合、鋲配置、地板形状などがある。鉄板の結合は、基本的にすべて二枚留でおこなわれており、二枚留が志向されていたことは明らかである。鋲配置に関する言及はこれまでいくつか存在する（田中1975：1991再録のp.286、滝沢1991：pp.21-23、古谷毅1996：pp.68-69）が、その中で、鋲配置を分類し変遷を示した滝沢の分類では、本例の鋲配置は引合板部がD類、押付板部がa類となる。このうち鋲配置a類からは、押付板と帯金結合の後に地板結合という製作工程が想定されるが、その場合、地板で充填すべき空間が地板結合前に形作られることとなる。そのため、当該部分の地板をあらかじめ厳密に設計する必要がなく、製作の簡略化につながる。この鋲配置が見られるのは他の地板との重なりなどを考慮する必要がない前後胴上段地板付近に多いこともこの想定を支持するものであろう。

本短甲は、いずれも最新相の横矧板鋲留短甲に見られる諸特徴を備えている。基本的な段構成すら変更した前胴6段構成は、従来から前胴7段構成の横矧板鋲留短甲の簡略化したものとして捉えられている（小林1974：1991再録のp.159、滝沢1986：p.86、吉村1988：p.29、橋本2002：p.7など）。また、厳密な設計を省いた地板製作や鋲配置、三枚留を避けた鉄板の結合など、製作にかかわる諸特徴からは一貫した製作簡略化への志向が見出される。したがって本短甲は、鋲留短甲の中でも、もっとも新しい段階に製作されたものと評価することができ、古墳時代中期後葉、須恵器型式ではTK47型式期に位置付けることができる。

### （3）鬼塚古墳（図6）

鬼塚古墳出土の甲冑は、三角町（市町村合併にともない、現在は宇城市）による報告では横矧板鋌留短甲片であるとされていた（米倉・三山・林田1985）。鉄片の多くは小片で部位不明であったが、資料を検討した結果、小札鋌留眉庇付冑の受鉢（1）、伏板（2）、帯金片（3～8）、小札片（9～17）、鍔片（18～26）、冑の腰巻板もしくは鍔片（27）、そして、短甲の可能性がある破片（28）が確認された。部位が判断できる鉄片について図示し、以下に概要を述べる。

受鉢（1）は小片であるために全体形は不明確であるが、現存する破片から直径を復元すると約4.2cmの円形であると考えられる。鉢の深さは浅いものと思われる。内外面ともに有機質の付着は認められない。

2は小片であるが、鉄板の湾曲などの状況から伏板と判断できる。外面に鋌が2つ留められており、内面に鋌留された小札片が認められる。復元される直径は12.6cm程度となる。

帯金片（3～8）は6点確認される。そのうち、胴巻板、もしくは腰巻板と判断できるのは3・4で、3が腰巻板、4が胴巻板である。3には眉庇の断片が残存している。眉庇の立ち上がり部の高さは低い。欠損のため、底部の文様は不明である。庇の下部に、鉄板の結合を目的としない飾鋌が認められる。4は内面に小札が5枚認められる。また、この破片から、胴巻板の上下幅が3.2cmであることがわかる。そのほかの帯金片は、部位など不明である。

地板には小札（9～17）が用いられている。伏板や胴巻板の内面に遺存している小札の破片やそのほかの破片から判断すると、上段地板は上端部が三角形状に裁断され下端部は長形状をした小札で、下段地板は上端がやや幅の狭い台形状の小札であると考えられる。10～12・14は小札の上下が判断でき、かつ横方向に小札を重ねた痕跡が認められる。本例が通有の冑同様、小札を前頭部側から順に下重ねするものであれば、これら小札は右側頭部に用いられていたものと判断できる。小札の大きさは、横幅が2.4cm程度であるが、上下幅は不明である。

鍔片と判断されるものも多く存在する（18～26）。中には、冑の帯金にも見える破片があるが、これらの幅が上記の帯金片と異なること、内面に小札が重ねられた痕跡がないことから鍔と判断して間違いないだろう。これらの鉄片から判断される鍔の形態は、二段構成以上の板鍔で板幅は約3.5cmであること、前端部は外側に折り返され、端辺沿いに革覆輪が施されていること、緘孔は板下辺沿いにあり、最下段のみ下辺が折り曲げられているらしいことである。

27には穿孔があり、周辺に有機質が遺存している。冑の腰巻板か鍔片と思われるが部位が判然としない。

28は短甲片の可能性がある鉄片である。小片で板全体の形状をうかがうことはできない。板の厚さが約3mmで、他の冑や鍔の破片と比べるとやや厚いことなどから、短甲片の可能性があるが、断定できるほどの情報を得ることができない。穿孔が1箇所認められる。現状から推測して三角形板になるものと思われるが、下辺が本来の形状を保っているのかどうか不明瞭である。穿孔の存在、三角形板であるという現状での推測からすれば、この鉄片が短甲片である場合、三角板革綴短甲の地板片であると解釈できる。しかし、この1片をもって本墳に短甲が存在していたと断定するのは難しい。こうしたことから、鬼塚古墳からは、多段構成の板鍔が付属した小札鋌留眉庇付冑が出土していることが言える。また、三角板革綴短甲も副葬されていた可能性もある。

以上から、鬼塚古墳には鍔の付属した小札鋌留眉庇付冑と三角板革綴短甲の可能性がある鉄片の存在が確認された。これらのうち、ある程度形態的特徴の把握できる、小札鋌留眉庇付冑と鍔について

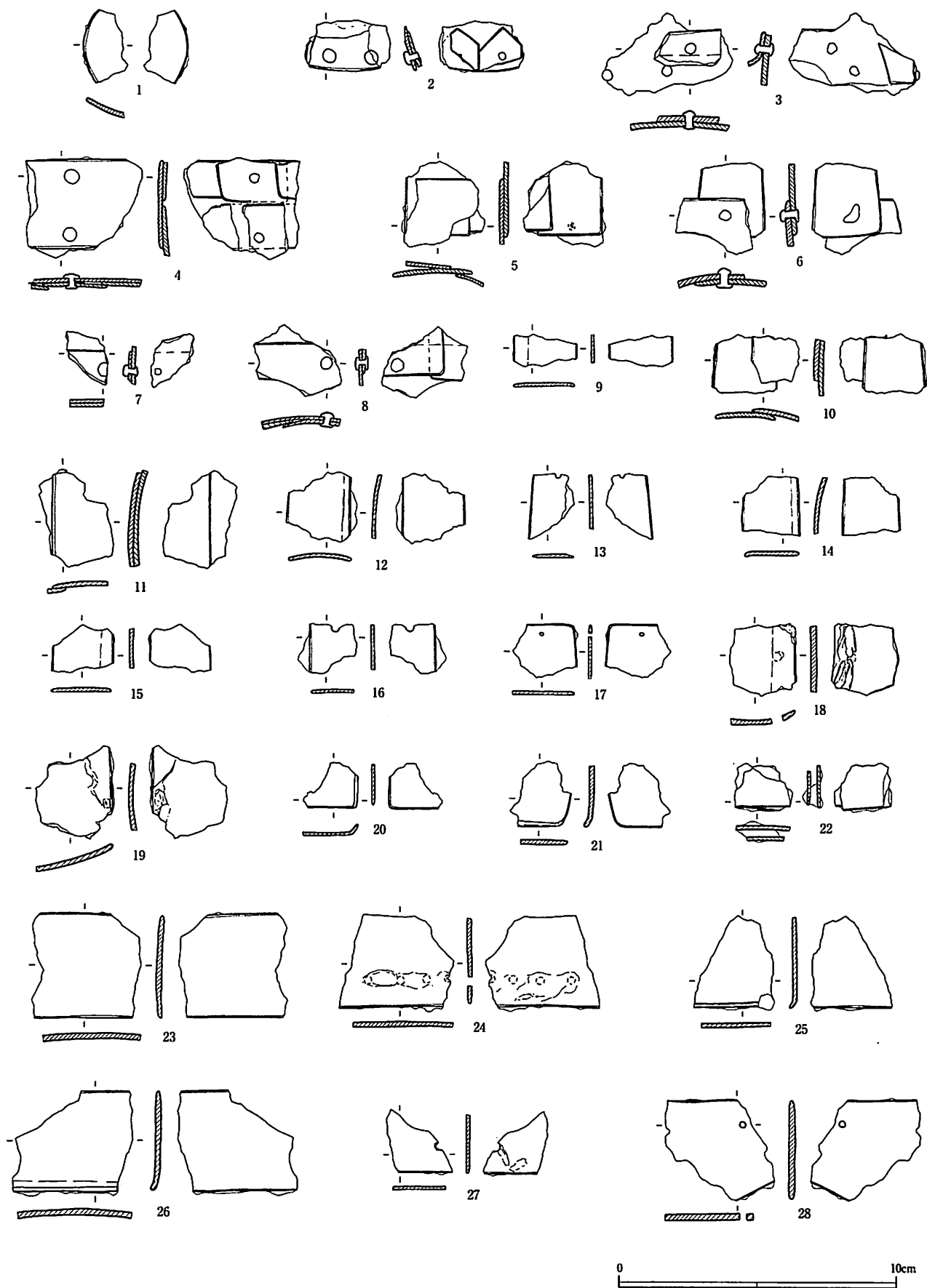


図6 鬼塚古墳出土甲冑実測図 (Scale : 1 / 2)

検討する。

眉庇付冑の変遷を考える上では、底部の文様形態が重要視されている（橋本達也1995：p. 12）。しかし、本例ではそれを知ることができない。また、小札を地板に用いる眉庇付冑は、眉庇付冑の製作開始から終了まで見られるもので、時期的位置づけをおこなう根拠にはなりえない。本例の時期的位置づけをおこなうにあたって注目できるのは、腰巻板に見られる飾鋌と、鋌径である。飾鋌をもつ眉庇付冑は橋本が設定した眉庇付冑製作段階の第2段階のうちでもその前半に位置付けられており（橋本2005：p. 279）、須恵器型式ではおおよそTK216～TK208型式期に該当しよう。また、橋本は、鋌径が4mm程度のものは第2段階、6mm程度のものを第3段階に位置付けており、鋌径が5mm程度の本例はその中間的様相を示している。

鋌は、前端部が若干外側に折り曲げられ、端辺に革覆輪が施された板鋌であることがわかる。板の上下幅は3.5cmである。段構成は、鋌留冑に付属しているものであることから3段構成以上のものであったと推測される（古谷1988：p. 14）。これらの特徴は、カミノハナ1号墳の鋌とほぼ同じものである。そうであるならば、この鋌もTK208型式期新相段階に位置付けられるものであるとみられる。

以上のように、本例から得ることのできる断片的な情報から推測すると、やや新旧の要素が混在しているように見える。また、各要素もある程度の時間幅の中に存在していたものと考えられるし、現状で冑、鋌全体の構造を把握することができず、本例の製作年代を絞り込んでいくことは難しい。そのため、ある程度の時期幅を持たせた形で位置づけておきたい。したがって、本例は須恵器型式ではTK216～TK208型式段階にその製作年代を求めておきたい。

## 2 天草北部島嶼域甲冑出土古墳被葬者の性格と甲冑配布の背景

### (1) 天草北部島嶼域甲冑出土古墳被葬者の性格

上で天草北部島嶼域から出土した甲冑について検討した。その結果、カミノハナ1号墳からは、鋌留冑と鋌が、カミノハナ3号墳からは横矧板鋌留短甲が、鬼塚古墳からは小札鋌留眉庇付冑と鋌が出土しており、短甲の可能性のある鉄片も存在していることが明らかになった。これらの甲冑は、古墳時代中期中葉から中期末に位置付けられるものであり、天草北部島嶼域には古墳時代中期中葉以降、中期末まで甲冑がもたらされていたと言える。また、図1を見ても明らかなように、天草北部島嶼域の甲冑出土古墳の分布には明らかな偏りがあることがわかる。本州など主要4島を除くと日本第8位の面積を有する天草下島を含む広大な天草島嶼域にありながら、甲冑出土古墳がみられるのは、いずれも有明海と八代海を結ぶ天草北部島嶼域のみである点は、これらの古墳の性格を考える上で重要な点であろう。

出土した甲冑は、カミノハナ1号墳、鬼塚古墳では冑1個体のみ<sup>(1)</sup>、カミノハナ3号墳では短甲1領のみであり、各古墳間で甲冑の保有について差を見出すことはできない。ただし、カミノハナ3号墳は中期中葉以降に列島各地で多く見られる短甲1領のみの副葬であるのに対し、カミノハナ1号墳、鬼塚古墳は冑のみが副葬されており注目される。

また、これら古墳の墳形はいずれも円墳で、規模は10数mであり、小規模なものであると言える。しかしながら、大型古墳の築造されない天草北部島嶼域においては、有力な古墳の一つであるとも捉えられる。カミノハナ1号墳が天草北部島嶼域で唯一の埴輪樹立古墳であることも、このことの証左の一つであろう。内部主体をみるといずれも横穴式石室で、互いの構造的類似性が指摘されている（米倉・三山・林田1985：p. 26）。



以上のような点から、天草北部島嶼域の甲冑出土古墳を見ると、多くの共通点が見出せる。すなわち、地理的に近接していること、古墳時代中期中葉以降に位置づけられる甲冑が副葬されていること、セットでの甲冑副葬がなされないこと、小規模な円墳で内部主体が構造の類似する横穴式石室であることなどである。これらの共通点を持つ天草北部島嶼域甲冑出土古墳の被葬者は、同じような性格を持つものと考えられる。いずれも小規模な円墳でありながら、地域内では有力なものであり、甲冑が副葬されていることなどから、小地域内の首長でありながら、甲冑の配布を受けることのできた存在であったと言えよう。

## (2) 天草北部島嶼域への甲冑配布の背景

古墳時代中期において、甲冑は中央政権による一元的な製作がおこなわれ、政治的、社会的な紐帯の証として各地に配布されたものであると捉えられている。したがって、甲冑の存在する地域は中央政権との関係をもっており、そこには何らかの背景が存在しているものと考えられる。それは天草北部島嶼域に関しても例外ではない。

天草北部島嶼域へ甲冑が配布された背景を考えると、各古墳から共通して出土している独立片逆刺長頸鏃に注目できる。独立片逆刺長頸鏃は、中央政権が生産と配布に強く関与する威信財的な性格を持つこと、朝鮮半島南部地域と深いかわりを持つ人物が手にした特殊な鉄鏃であることが指摘されている（鈴木2003：p. 15）。また、甲冑との強い共伴関係も見出されており（鈴木2003：p. 15）、天草北部島嶼域の甲冑出土古墳から出土した独立片逆刺長頸鏃も甲冑と共に中央政権から配布されたものと思えることができる。目を広げて熊本地域全体を見ても、独立片逆刺長頸鏃が出土しているのは、天草北部島嶼域のほかは菊池川下流域の江田船山古墳、菊池川支流である合志川流域のマロ塚古墳のみである。この天草北部島嶼域と菊池川下流域、合志川流域における甲冑と独立片逆刺長頸鏃という遺物の出土、それらがもたらされた時期などの共通項からは、これらの地域の甲冑配布に同様な背景が存在していたことがうかがえる。

菊池川下流域は、5世紀中葉以降、朝鮮半島との交渉を中心的に担うようになったとされる地域の一つである（白石2003：p. 267, 白石2004：p. 497）。また、古墳時代中期後葉に甲冑が集積する地域の一つであり、複数埋納墳が多い。特に小規模な円墳とされているマロ塚古墳は冑3個体、短甲1領、頸甲3個体、肩甲という多量の甲冑が副葬されている特異な存在である。そして、ほぼ同時期から多くの朝鮮半島系渡来文物が見られるようになり、その契機として朝鮮半島との交渉活動があったという考察がある（西嶋2005：p. 89）。

ここから、菊池川下流域と同様な甲冑配布の背景をもつとみられる天草北部島嶼域も、朝鮮半島との交渉活動を担っていたものと考えられ、その中で中央政権から甲冑や独立片逆刺長頸鏃などの配布を受けたのであろう。ただし、両地域の墳丘規模や甲冑の在り方には、格段の差が存在し、そこには、中央政権とのかかわりの深さのほか、朝鮮半島活動における役割の差が反映されているとみてよいだろう。すなわち、稲荷山古墳や、江田船山古墳など規模の大きな前方後円墳が存在し、朝鮮半島系渡来文物などの豊富な副葬品が存在する菊池川下流域の勢力は、朝鮮半島での活動の中心的な役割を担っていたと考えられるのに対して、小規模な円墳で武器類を中心とし、1古墳1個体のみ副葬という甲冑の在り方である天草北部島嶼域の勢力は、菊池川下流域のような中心的役割を果たしている勢力の周辺に存在する勢力として、朝鮮半島での活動にかかわっていたものとみたい。

また、当地域は、横穴式石室の導入が最も早い地域の一つであるが、このようなことも、こうした

活動を通してなされたものと見られる。

## おわりに

今回は、天草北部島嶼域の甲冑について検討し、それを副葬する古墳の性格や甲冑がもたらされた背景について若干の考察をおこなった。天草には数多くの古墳が存在し、その様相も様々である。天草地域の古墳時代像を考える上では、それらの古墳や遺物についても検討していく必要がある。今後の課題としたい。

**謝辞** 本稿を作成するにあたり、宇城市教育委員会、熊本大学文学部考古学研究室の皆様には、資料の実測、掲載にあたって、ご高配を賜りました。また、古谷毅、杉井健、橋本達也、鈴木一有の各氏には、多大なご指導、ご協力を賜りました。文末ながら御礼申し上げます。

## 注

- 1) 鬼塚古墳では、短甲片の可能性のある鉄片が出土している。しかし、確実に短甲であると判断できないため、ここでは冑のみ出土という扱いにしている。

## 引用・参考文献

- 熊本大学文学部考古学研究室編 1982「カミノハナ古墳群」2 研究室活動報告14 熊本大学文学部考古学研究室  
小林謙一 1974「甲冑製作技術の変遷と工人系統」『考古学研究』第20巻第4号 考古学研究会（引用は、1991年発行『論集武具』学生社：pp. 149-198より）
- 白石太一郎 2003「倭と加耶の交流の歴史的意味」『第5回歴博国際シンポジウム 古代東アジアにおける倭と加耶の交流』国立歴史民俗博物館：pp. 265-270
- 白石太一郎 2004「もう一つの倭・韓交易ルート」『古代東アジアにおける倭と加耶の交流』国立歴史民俗博物館研究報告第110集 国立歴史民俗博物館：pp. 483-502
- 鈴木一有 2003「副葬鉄の変質」『武器生産と流通の諸画期』七世紀研究会：pp. 11-25
- 鈴木一有 2009予定「小札鋌留衝角付冑の変遷とその意義」『マロ塚古墳出土品を中心にした古墳時代中期武器武具の研究』国立歴史民俗博物館研究報告 国立歴史民俗博物館
- 滝沢 誠 1986「甲冑類の編年的位置と古墳の年代」『武者塚古墳』新治村教育委員会：pp. 68-70
- 滝沢 誠 1991「鋌留短甲の編年」『考古学雑誌』第76巻第3号 日本考古学会：pp. 16-61
- 滝沢 誠 2001「多田大塚古墳群出土の短甲をめぐる」『静岡県的前方後円墳-個別報告編-』静岡県文化財報告書第55集 静岡県教育委員会：pp. 61-67
- 滝沢 誠 2008「古墳時代中期における短甲の同工品に関する基礎的研究」静岡大学人文学部
- 田中新史 1975「五世紀における短甲出土古墳の様相-房総出土の短甲とその古墳を中心として-」『史館』第5号 史館同人（引用は、1991年発行『論集武具』学生社：pp. 270-300より）
- 角田政治 1918「五 三角町の古墳」『熊本県史蹟調査報告』第一回 熊本県教育会史蹟調査部：pp. 21-23
- 西嶋剛広 2005「肥後地域における渡来系文物の受容と展開」『九州における渡来人の受容と展開』第8回九州前方後円墳研究会 九州前方後円墳研究会：pp. 86-97
- 橋本達也 1995「古墳時代中期における金工技術の変革とその意義-眉庇付冑を中心として-」『考古学雑誌』第80巻4号 日本考古学会：pp. 1-33
- 橋本達也 2002「九州における古墳時代甲冑-総論にかえて-」『考古学ジャーナル』No.496 ニュー・サイエンス社：pp. 4-7
- 橋本達也 2005「(3) 稲童21号墳出土の眉庇付冑」『稲童古墳群』行橋市文化財調査報告書第32集 行橋市教育委

員会：pp. 276-285

古谷 毅 1988「京都府久津川車塚古墳出土の甲冑-いわゆる“一枚鏃”の提起する問題-」【MUSEUM】No. 445 ミュージアム出版：pp. 4-17

古谷 毅 1996「古墳時代甲冑研究の方法と課題」【考古学雑誌】第81巻第4号 日本考古学会：pp. 58-85

吉村和昭 1988「短甲系譜試論-鋌留技法導入以後を中心として-」【考古学論攷】第13冊 奈良県立橿原考古学研究所：pp. 23-39

米倉秀紀・三山 茂・林田奈生子 1985「V 鬼塚古墳」【宇土半島古墳群分布調査報告（郡浦・戸馳西地区）】三角町文化財調査報告第4集 三角町教育委員会：pp. 21-27

#### 挿図・表出典

図1 筆者作成

図2 熊本大学文学部考古学研究室蔵：筆者作成

図3 熊本大学文学部考古学研究室蔵：筆者作成

図4 熊本大学文学部考古学研究室蔵：筆者作成

図5 熊本大学文学部考古学研究室蔵：筆者作成

図6 宇城市教育委員会蔵：筆者作成

表1 筆者作成